

シナリオ：少年F —— 救えた日と、救えなかった日

制作中のビルド（探索区間）で実際に流れる会話の台本と、戦闘中に漏れる本音の5段階です。同じ人物が、期限内に会えたときと、期限を過ぎてハコビトになってしまったときで、何を言うかが変わります。

書き方の原則

- **主人公は無口。** 台詞を持たず、選択肢も言葉ではなく仕草（うなづく／手を伸ばす）で表す。
- **人物に設定を説明させない。** ハコビト化率などゲーム上の数字は、登場人物は知らない。状態や世界観を台詞で解説しない。
- **本音は、救えなかったときに一番はっきり聞こえる。** 救えたときは「漏れかけて、飲み込む」までしか出ない。

人物

少年F。プロスポーツ選手の父を持ち、学園中から期待されている。壊れるまで、その強さが誰にも分からない少年。圧力の出どころは一つではない——父、監督、仲間、町、メディアの全部。世界が変わって、ほんの少しだけほっとし、少しだけ期待した。設定の詳細は「設定資料：キャラクターと世界」を参照。

1. 期限前 —— 救えた日

主人公は少年Aを仲間にしたあと、期限の日のうちに公園で少年Fに会う。

話者	台詞
少年F	ああ、お前も生きてたとはな。
少年F	誰か探してるのか。
主人公	[うなづく] / [周りを見る]
少年F	そうか。 なあ。お前、この世界ってさ.....
主人公	[.....?] / [黙って待つ]
少年F	いや。なんでもない。
少年F	一緒に行くよ
少年F（独白）	そうだよな。 世界がこうなっても、俺は俺から逃げられない。

「この世界ってさ.....」の続きを、彼はここでは言わない。この含みの正体は、救えなかった側で分かる。

2. 期限後 —— 救えなかった日

拠点で休んだ一日が、少年Fの期限だった。次に会ったとき、彼はもうハコビトになっている。

話者	台詞	演出
少年F	お前か。遅かったな。	

話者	台詞	演出
少年F	俺はな.....あの世界にうんざりしてたんだ。	
少年F	どいつもこいつも、俺の生き方が 決まってるような言い方をしやがる.....。	
少年F	負けるな。走れ。勝て。どこにいたって、聞こえてくる。	ゆっくり
少年F	なあ、あの声の裏で流れてたのは、 誰の血だと思う？	ゆっくり
少年F	俺の血なんだよっ！！	叫び（一拍→衝撃音→画面の揺れ）
少年F	耐えてたんだ！！　ずっと！もう、限界だったんだ。	
少年F	それが.....今は、聞こえないんだ。 あの声が、何一つ。	ゆっくり
少年F	なんだよ、これ。 こんなに、楽なのかよ。	ゆっくり
主人公	〔手を伸ばす〕／〔動かない〕	選択
少年F	お前にも、分けてやるよ。 聞こえなくなるんだ。全部。	ゆっくり
——	少年Fは、もうこちらの言葉を聞いていない。	地の文 → 戦闘へ

ハコビトは、被っていない者に箱を被せようとする。「分けてやる」は彼にとって善意の誘いで、だから怖い。彼にとってはこの姿のほうが幸せなのかもしれない、という含みを残して戦闘に入る。

3. 戦闘中に漏れる本音（5段階）

戦闘で被弾するとハコビト化率が上がり、20% ごとに本音が短いログとしてこぼれる。聞いた本音は生徒手帳に残り、次の周回で救う手がかりになる。

言葉の矛先が、自分 → 頭の中の声 → 隣にいる主人公へと移っていき、主人公に向いた瞬間が敵化。80% までは少年F本人の言葉で、ハコビトの口調は使わない。

化率	本音	矛先
0%	（建前。何も言わない）	
20%	別に、期待されたくてやってた訳じゃない	自分
40%	父さんの名前で呼ばれるの、正直うんざりだった	自分
60%	あの騒ぎで試合が無くなって、ほっとした自分がいる	自分（いちばんの秘密）
80%	勝て。勝て。勝て.....。もういい。聞きたくない。頼むから.....！	頭の中の声
100%	どいつもこいつも、俺の生き方が 決まってるような言い方をしやがる.....	隣の主人公
100%	お前に俺の気持ち分かるかよっ！！！！ —— 叫び。敵側に回る	隣の主人公

4. 少年Aとの会話（参考）

同じ探索区間で、最初に仲間になる少年Aの会話。少年Fの含みと対照になるよう、こちらは弱さを隠さない人物として書いている。

話者	台詞
少年A	誰かと思った。お前か。
少年A	学校に残ってたのは、俺だけだ。 みんな箱を被って、どこかへ行っちゃった。
主人公	[うなずく] / [周りを見回す]
少年A	お前がいて助かったよ。 一人で不安だったんだ、一緒に行動しよう。
少年A	少年Fなら公園にいた。 今日のうちに行った方がいい。
少年A	正直、俺はもう立ってるのもきつい。 拠点で一晩休めるなら、休みたいけど。

拠点で「休む（1日が過ぎる）」を選ぶと、少年Fの期限が過ぎる。休まず公園へ向かえば、少年Fを救える。